

米ソ首脳会談と 今後の国際情勢

入江通雅 ▲ 中嶋嶺雄
(京都産業大学教授) 対談 (東京外語大助教授)

変則的な米ソ中の関係

中嶋 ニクソンの訪ソが終わり共同声明が発表されましたが、これをどう評価するか、いわば大国外交のゆくへについて話し合ってみたいと思います。

その前にある新聞の社説が今回の米・ソ、コミニケを見て、これは中国のことをひと旨もメンションしてないと。アジアの問題を解決するのに中国の力が非常に重要であるにもかかわらず、中国問題がメンションされていないから意味が

ないというようなニュアンスの社説がありました。

しかし、わたくしは非常におかしい見方だと思えます。ご承知のように米・ソコミニケが去る二月に発表されましたが、これにはソ連の問題がひと旨も書いてなかったわけですね。それで今回のコミニケの背景、そしてこのコミニケの内容からお話したいのですが。

入江 そうですね、結局アメリカが中心になり米・ソ、米・中という二つのラインができてくるわけですね。中・ソの間にはあんまりラインがなく、むしろ対立が存在していると。これが三極構造の一つの特筆だと思えます。

わたくしはアメリカン・クラッカーといふことをよくいいます。つまり、おもちゃでアメリカン・クラッカーというのがあり、ひもの両はしに玉がついており、まん中を持ってカチカチ振るやつですね。そのプレイヤーはアメリカということですね。

で、結局中・ソはカチカチぶつかっている。この三極構造は非常に変則的で、いちばん有利なポジションを現在確保しているのはアメリカである。

したがって米・中関係、あるいは米・ソ関係について二つの大きな会談ができる兩國間の関係、あるいは世界問題に対する兩國の立場ということが話し合われたわけですね、それぞれのコミニ

ニケでお互いにもう一つの極のことについて言及していないのは当然のことだと思えますね。

むしろ、なぜアメリカが現在みたいな政策をとっているかといいますと、これは中・ソ対立が発生して、かたやアメリカのほうは国力が低下してきている。そういう状況の中で、ニクソンは中・ソ二つを主要な敵性国家であると見ているわけですね。

ですから敵性国家群を二つに分けてお互いに対立させる、これがニクソン訪中のねらいである。そのところを普通の正三角形みたいな三極構造と考えている人が多いようで、それがまちがいのものではないかろうかとわたくしは考えておりますね。

中嶋 最近三極構造ということばが非常にはやっているんですけど、これは現象面を見ただけで今日の世界がはたして三極なのかということは大いに疑問があるんですね。

そうしますと米・ソコミニケにはソ連がメンションされず、そして米・ソコミニケには中国がメンションされないというところですけれども、ただその場合に、わたくし米・ソコミニケを比べると、質的に非常に違うと思います。

というのは米・ソコミニケのほうは確かに今まで敵対関係にあった両者がドラムティックな出会いをしたという象徴的な意味があると思えます。ただど

たして実際に実利を伴う中身がどれほどあったかという点、これはいわば抽象的な表現の羅列を双方ともした。

そこへいくと今回の米・ソコミニケはご承知のようにいくつかの協定や条約を結びましたね。

ですからかなり実のあるということですね。ですから、この違いをよく見ておく必要があるわけで、やはり今日の世界の問題を考える上で、米・ソの力というものもが実際に非常に大きい力を持ち得ているし、それをまさに米・ソ両大国がお互いに自認し合っているという、それだけに両者間で調整すべき問題がいろいろある。それが戦略兵器制限交渉(SALT)の問題であるとか、それから宇宙競争の問題であるとか、そのほかの環境保護、それから医療協定などに出てきたという気がするんですね。

入江 ニクソンの立場からしますと、ソビエトとは平和共存関係が実は非常に古くから存在してたわけですね。つまり一九五五年のジュネーブ頂上会談や一九五九年のキャンプ・デービッド会談ですね。あるいはウィーン会談、グラスボロ会談というふうになつと米・ソ関係は敵性国家間の平和共存関係という長い歴史を持っているわけですね。

ところが米・中関係のほうは、まだ全くつながりがないという状態だったんで、ニクソンは中国との間もやはり敵性国家間の平和共存関係というものを作っ

ていきたいということであプローチしたんだと思いますね。

ですから北京に行ったときは、いわゆる両国間の平和精神が確認されればそれでよかつたんだし、共存関係の発展は今後待つということになるわけですけど、ソビエトの場合は平和共存の精神は、もう前からできてるわけで、むしろモスクワに行ったニクソンはビジネスライクに具体的な問題の解決に全力をあげてやったわけで、多くの協定が結ばれたというのは偶然じゃないと思うんですね。

中嶋 やっぱり米・ソ間にはそれだけの歴史の基盤があったということでしょうね。そうしますと、米・中コミュニケが出たときに、日本でいちばん象徴的なのは、これは緊張緩和だという意見がすぐ出ましたでしょう。わたくし米・中会談の背景にあるものを考え、今日のアジアを考えてみて、むしろ多面的な緊張が出てくるんじゃないかと思うんですよ。

それは現にベトナム戦争の再激化という形で出たんですけれども、今回の米・ソ、コミュニケによって逆に中・ソが和解するのではないかというような意見が一部に出ていますが、これは非常にナンセンスであって、絶対それはあり得ないと思いますが、そのへんはいかががでしょうか。

入江 わたくしも結論的にいえば中嶋さんの判断と同じになると思うんですよ。

ど、ただ三種関係においてアメリカだけがいちばん有利なポジションを謳歌しているという状況はモスクワにしてもおもしろくないでしょうし、北京にしてもおもしろくないと。そこでもう少し自分たちの地位を高めようと思えば、この中・ソ間でもう少しラインをつけるということが必要になってくる。そういう政策的判断は当然両者とも持ち始めると思うんですね。

ただ実際問題としてこの中・ソの対立は、わたくしは非常に深刻なものであるし、なかなか解消する性質のものでないんで、中・ソがそれぞれ自覚していても、結局この三極ゲームではアメリカがいちばん有利なポジションを持ち続けるであろうというふうに判断してますけどね。

中嶋 わたくし入江さんよりも中・ソ関係は厳しいと考えているんですよ。つまり中国もソ連も、お互いにアメリカにウィンクして歩み寄っていく。だけどやっぱり基本矛盾なんですね、毛沢東のとばでいうと。

今日の基本矛盾である中・ソ関係については、やはりわたくしはそう簡単に調整ができないがゆえに、それぞれが歩み寄る。それは逆にアメリカがそれだけフリーハンドを持っているということですね。

入江 わたくしもそういうことを申し上げたわけですけどもね。要するにアメ

リカがいちばん有利なポジションですね。これは中・ソがいかに努力して和解に努めても、どうも達成されそうもないんで、この状態は長続きするということなんです。

中嶋 その場合に、アメリカが有利だというのは、長期的に見るとなおさらそうであって、つまりニクソンの中国政策というのは、やはり中・ソ関係を十分見ながら、展開していくんだと。つまり中国を開かれた世界に引き出していくということだろうと思うんですね。

一方ソ連は長期的にみればますます西欧化への衝動というものは激しいと思うんですね。わたくしはソ連も中国も行ってみたくはすけれども、とくにソ連の場合に、アメリカ人というのは非常にもてるんですね。それは逆にいえばだんぜん西欧化が進んでいくことからみましても、確かにアメリカというのは有利な地位にいると思うんですけどね。

ただ、にもかかわらずアメリカのジレンマがベトナムの問題としてあると思うんですね。わたくしはやはりアメリカ、とくにニクソン政権は短期的にみた場合かなりジレンマに陥るんじゃないか、というのはニクソンが今期の大統領任期のうち、ベトナムの問題を解決したいというのはいわば選挙民に対する公約でもあった。

一方、マクガバンみたいな大統領候補がベトナム和平派として出てきているわ

けですから、その状況を考えますと、この秋までにはベトナム戦争のめどをつけるを得ない方向にしいやられるんじゃないか。

ニクソンの六九年のグラム・ドクトリン以降の政策というのは基本的には今期の大統領任期のうちにベトナム政策を一応処理し、それがうまくいき次に大統領選挙に再選されたときに、いわば中国との関係改善に向かうんだという、大きな見通しがあったと思うんですね。

ところが、北側もかなりかたくなな出方をしてきたということもあるし、それから例のカンボジア作戦、ラオス作戦が必ずしもアメリカの思うままではなかった。そんなことから、今度は中国と話をつけなければベトナム問題は解決するんじゃないかという方向に転じていった。これはニクソン、キッシンジャー・ラインが当初のプログラムを修正した結果だと思っ

そのために明らかに米・中接近の反動としての北ベトナムの四月の攻勢、とくに北ベトナムは米・中会談にかなり反発しておりましたからね。

それをソ連は心にくいばかりに利用していたわけで、そういうことから、やはりベトナムの問題をめぐってはジレンマに陥っている。同じことが中国の内部でも、周恩来に対してアメリカなんかと手を結んだからという意見が潜在的にあると思うんですけどね。

やはり短期的にみますと、この問題はニクソン政権にとっていろいろ考えなければいけない要素があると思うんですけども、そのへんはいかがでしょうか。

米・ソ・中三国の異なる思惑

入江　そうですね、わたくしは三月十日の北ベトナムの南ベトナムに対する大侵略ですね。こういった行動をとるとはニクソンも予期してなかったと思うんです。

で、むしろこの前のテト攻勢以来、カンプチア作戦、ラオス作戦を展開して南ベトナムの安泰を確保して、しかも南ベトナム内部において、しだいに平定計画を進め、結局一回は落ちたユエも取り返しほとんど全土にわたって一応静かな平和的な状態を盛り返してきたわけですね。

そこでニクソンとしては、なんとか軍隊を五十万引き揚げたとかいうことで、選挙民にもそれなりのアピールはできただろうと思うんですがね。

ところが北側が大侵略の行動に出てきたために、アメリカとしてはどういうふうに対応するかという決断を迫られたわけですね。

ところが二月の米・中会談でこれから米・中共存でいこうやという方向にスタートしたばかりの矢先のことですね。ですからおそらくアメリカが相当強硬な手段をとっても、米・中関係の既存の方向

というものはなかなかずされないと判断ができたと思うんですね。

しかもこの米・中会談を推進したのは中国内部において毛沢東であり、周恩来である。しかもこれが林彪なんかの軍部勢力を退けた形で強行してきたわけですから、もしニクソンがこういう強硬な手段をベトナムに関してとるということが予見できないで、米・中関係を改善してきたということになりますと、それは政治的な不明であって、周恩来や毛沢東の責任にもなり得る。

それだけに中国としてはあまり強硬な対抗手段には出れないであろうと、米・中関係をたいせつにしていかなざるを得ない。そういう読みがニクソンにはあったと思うし、それからまた米・ソ会談ではソビエトがこの米・ソ会談をキャンセルするというような対抗手段をとるということは三極構造からいってできない。なんとか米・ソ会談は開きたいという意思が強かっただろうと思いますし、それにこの米・ソ会談を推進したのもブレジネフです。

それからソビエトの国内経済の状況、あるいは核軍備競争がある程度スロウダウンする、経済的必要、そういうようなことを考えた場合に、どうしてもソビエトは米・ソ会談は開きたいであろうというふうに読み取ったんだろうと思いますね。

それで、おそらくハイフォンの封鎖で

あるとか、あるいは北ベトナムの中国国境三十キロぐらまでの非常に近いところまで、鉄道、橋梁、道路などに強硬な爆撃作戦を展開した。こういう選択を取り得たのは、まさしく米・中関係をスタートさせ、それから米・ソ会談を控えていたという時点であつたればこそ可能であつた。

ニクソンとしては前からこれをやれば効果があるということはわかってたけれども、米・ソ対決、米・中対決に発展する可能性があつたためにそういうリスクを考へてなかなかできなかった政策です。

それが今できたということは、ニクソンの国際政治の基本的な関係である米・中関係、米・ソ関係の改善という、その過去二、三年にわたる努力のたまものだけということがいえると思いますし、もう一つ重要なことは、非常に強硬な北爆作戦とか封鎖作戦で会談が行なわれ、数々の協定が調印され米・ソ平和共存がうたい上げられる。

これによってアメリカの封鎖作戦をソビエトが、少なくとも協定を結んだこと自体によって黙認したということですね。

ですからアメリカは封鎖作戦をずっと続けていけるし、ソビエトはそれを軍事的な強行手段によって突破するというようなことはしないでしょう。

そうなりますとベトナム戦争の帰趨と

いうのは、この秋ぐらには北ベトナムも軍事物資の枯渇から政治的な停戦に陥ざるを得ないような状況に近づいていくだろう。少なくともベトナム戦争の規模というか、戦闘の規模はしだいに縮少していくのではなからうか。

ですからベトナム戦争を選挙の争点からはずすというニクソンの当初の目的はある程度達成された、わたくしは考えております。

中嶋　確かに大国チームの第一ラウンドは完全にニクソンの勝利だと思うんですね。それは中国にもソ連にも弱みがあったからこそ、ニクソンを呼ばざるを得なかった。

そしてソビエトとしてはベトナム問題よりも、ある意味では重要な問題がたくさんあった。優先順位でいえばやっぱりヨーロッパ中心だろうと思いますから、おそらくソ連の本心としてはベトナム戦争によって直接の利害である米・ソ関係を傷つけないというのが本音だと思いますね。

ただ、今回の北側の攻勢は、たいへん規模が大きいし、それにはソ連の援助抜きには考えられないので、わたくしはベトナムの解決は秋よりも少し遅いと思うんですがね。

入江　まあ政治的な話し合いはことしの秋とはおそろしくいかないでしょうね。ただわたくしが申し上げたのは秋の選挙ぐらいの時点までに、ベトナム戦争自体

が、南ベトナムにおける戦闘の規模が縮少すればニクソンの大勝利ですわね。

不可解な中国の実力

中嶋 今回の米・ソのコミュニケーションを見ますと、ヨーロッパの問題が、ソ連にとってもかなり重要であったということ、それから国際問題の第一番目も、やはりヨーロッパから書いておきますね。

これはある意味ではアメリカにとってもそうなんでしょう。そういうことから見ますと、米・ソ会談の直前に、西ドイツも例の東方条約を成功させた。これはソ連にとっても、あるいはアメリカにとっても非常に歓迎すべきことであつたらうと思うんですけども、そのへんの問題はどうか。

入江 やはりソビエトにとつては、アメリカの核の軍勢力というものは常に最高の敵の軍備として念頭にはあると思えますけどね。当面の、現実的に危険な勢力としては、おそらく中国の軍備というものを考えているだらうと。結局中・ソ対立を意識すればするほど、ヨーロッパ方面を安定させておきたいと思うわけでしょう。

そういう意味で全欧安全保障会議の開催であるとか、ヨーロッパ正面での和解、緊張緩和は、おそらくソビエト外交の一つの大きなポイントだったと思えますね。

ですから、それがあつた程度成功したこ

とはソビエトとしては、これから中・ソ対立に備え得るといふ体制を固めたことになるわけですね。外交上も成功だと評価できますね。

中嶋 プレジネフは意外にゴリゴリの現実主義で中国からも反発を買つたし、アジアでも人気がなかったんだけど長期的に見れば、アメリカの優位はくずれないとしても、短期的に見ますとかなりのいわば地固めをしているように思えますね。

このところ国内問題を解決していないのに、とにかくブレジネフ体制を固めておられますね。またご承知のようにブレジネフ構想は、ある意味では中国封じ込め政策なんですけれども、これを去年の印・ソ条約あたりから今回のベトナム問題の背景を含めて、かなりアジアに定着させましたですね。

そういう意味からしますと、やっぱり米・中・ソ、あるいはEC、日本を含めた五極とよくいわれるんですけども、やはり基本的には今回の世界のスーパーパワーはアメリカであり、ソ連であるということとははつきりしているような気がしますね。

そこで、従来中国というのは実質的には力がなかったんだけど、いわば陰の力みたいなものを持つていたと思うんですよ。毛沢東が一所懸命、世界革命をいふとか、よくわからないという不可解さも含めて、中国が一つの力だったけれ

ども、今回中国としても、ニクソンを迎え入れた以上、あまりソ連も批判できないと。

アジア諸国においても、中国の影響力がだんだん減少していかざるを得ないと思うんですね。一方、国連にはいった中国はますますそうなんです、そうすると米・中・ソといひましても、やはり米ソですね。それに中国がどうからみ合うか、という形で今後も情勢が展開しそうな気がするんですけどね。

入江 そうですね。なんといっても国際政治を動かす力があるのは大国である。大国とはどういう国かというところ、軍勢力や経済力が大きかったりということ。結局軍勢力、経済力において米・ソは巨大なスーパーパワーですから、やっぱり別格でしょうね。

中国の場合は、人口は確かに世界一かも知れないけれども、経済力はGNPで世界七位ぐらいにすぎないわけですからね。だからおのずから中国の発言力には限界があるといわざるを得ないでしょう。ですから米・ソという二つの極という分け方ですね。それと同時に五つの極ということもニクソンは考えているわけですね。

その場合中・ソは敵性勢力であり、ECとか日本はアメリカの仲間うちだと。友邦勢力であるとか、そういう意味においてはあくまで二極なんです。だから、そういう点を理解することがアメリカ外

交を判断する上で重要じゃないかと思えます。

中嶋 わたくしは日本がいわばキッシンジャーがいつているように五極の一つに迎え入れられるからというんで、あまりおだてにのつてはいけないと思うんですけどね。その点やはり日本は大国ではないわけで、そのへんをしっかりと見つめた外交をすべきだらうと思うんです。

それをやっていけば、日本の外交的なオプションというのはますます拡大することができると。情勢が一方でかなり流動していますから、きめの細かい選択をすることによって、日・中関係という今後の大きな問題を踏まえても、その背景として日本がかなり外交的な立場を強めることができるというふうにも思っています。

(六月四日放送)

東京都港区赤坂一丁目九番十五号

日本短波放送

「世界に開く窓」

郵便番号 一〇七

電話東京(583) 八二五一一九

定価 六〇円 送料 十六円